

## II. 教育・授業改善、FD

### 1. 京都大学FD共有システム

コロナ禍の中で、本学のFD活動は様変わりしました。2020年3月末以降、本センターが実施してきたオンライン授業に関する講習会等には、学内からのべ1,329人の教職員とTAが参加し、動画視聴回数も659回に上ります(2022年1月31日現在)。そこでは、部局を超えた取り組みの共有や京都大学における教育のあり方に関する本質的な議論が自然と発生し、部局横断型のFDの有効性が実感されました。

こうした経験を踏まえ、本センターでは、2020年度全学経費「TA研修を含むFD活動の部局間共有・認証・参加認定システムの開発」(2020年10月～2021年9月)の助成を受け、「京都大学FD共有システム」を開発しました。本システムは、TA研修を含むFD活動を部局間で共有することにより、FD活動の効率化と教育改善の促進を図ることを目的としています。具体的には、「セミナーカレンダー」に全学や各部局のFD研修の予定が表示され、希望者の「マイページ」で参加記録を管理できるようになります。また、主催者側は、FD研修の参加者数を把握したり、事後アンケートを自動的に実施したりすることもできます。さらに、質の高い教育を提供していくために必要なTAの研修を対象に加えることで、教員とTAの間での教育活動に関する共通理解の形成、部局を超えた院生の交流、より高度なスキルを持ったTAの育成に貢献することもできます。2022年度より稼働する予定です。

(岡本 雅子・松下 佳代)



図1 京都大学FD共有システムのトップページ

## 2. 新任教員教育セミナー

2021年9月22日、Zoomを用いたオンラインによる「新任教員教育セミナー2021」を開催しました。本セミナーは、本学に採用された新任教員および助教から昇任された教員を対象に実施しています。セミナーでは「自由の学風」「対話を根幹とした自学自習」を理念とする本学の歴史と伝統、自律性を守りながら、「今の時代にふさわしい京都大学らしい教育」とはどのようなものなのかを考えるための機会と情報提供をしています。今回の参加者は、当日配布資料の名簿に掲載された人数が180名、Zoom上では一番多いときで、170名程度でした。

### (1) プログラム

プログラムは表1の通りです。全学、部局、個々の教員という異なるレベルでの教育的取り組みを、ミニ講義や討論などを通じて理解してもらうことを意図して設計されています。

表1 2021年度京都大学新任教員教育セミナープログラム	
13:00～	開会式（司会：佐藤 万知 高等教育研究開発推進センター准教授） 趣旨説明：松下 佳代 高等教育研究開発推進センター教授
13:05～	第1部 全体セッション オープニングレクチャー 「現在の京大生の動向と教育における諸課題」 平島 崇男 理事(教育・情報・図書館担当)・副学長
13:30～	レクチャー 「コロナ禍における学生のメンタルヘルスについて」 杉原 保史 学生総合支援センター長 「私の授業」 久家 慶子 理学研究科教授 ファシリテーター：佐藤 万知 高等教育研究開発推進センター准教授
14:15～	休憩
14:30～	第2部 グループ別セッション(参加型セッション)(詳細は表2参照) テーマ①「留学生とどう向き合うか」 テーマ②「研究室運営を考える」 テーマ③「困難を抱えた学生に向き合うには」 テーマ④「アクティブラーニング型授業をやってみよう」 テーマ⑤「これからのオンライン授業を考える」 テーマ⑥“Internationalization of Japanese higher education and Kyoto University's endeavors”

第1部の全体会では、まず平島崇男理事(教育・情報・図書館担当)・副学長より「現在の京大生の動向と教育における諸課題」と題してオープニングレクチャーがありました。修了年限内に学士課程を修了する学生の割合や大学院(前期・後期課程)への進学動向などのデータが示され、より多くの学部生が大学院に進学し、専門性をもって社会で活躍することが、大学の大きな目標であることが示されました。次に、学生総合支援センターの杉原保史センター長より「コロナ禍における学生のメンタルヘルスについて」と題して報告がありました。通常とは異なる大学生活が長期化する中で、メンタルヘルス上の課題を抱える学生の増加が示され、授業中や授業前後のちょっとした声かけにより、学生も不調を訴えることができるようになるため、こまめな対話の機会を設けることの必要性が指摘されました。最後に、理学研究科の久家慶子教授より「私の授業」と題して、ご自身の教育活動に関する試行錯誤についてのお話がありました。地球物理学の実際の授業の再現や、教育理念の共有、京都大学らしい教育に対する考えの変容なども共有されました。

第2部では、用意した6つのテーマに分かれてのワークショップが実施されました(表2)。

表2 第2部 グループ別セッションの各テーマと内容			
テーマ	担当講師	主な内容	ファシリテーター (センター担当者)
留学生とどう向き合うか	環境安全保健機構健康管理部門 (留学生相談室)講師 梁瀬 まや	研究室や授業のクラス内に留学生を見かけることが珍しくない時代となりました。しかし、異なる語学力や社会文化的背景を持つ国々の学生がわが国で直面する生活・教育環境には未だ課題の残る現状があります。日本人学生と留学生が共に気持ちよく学び、多様性を建設的な議論へと結びつけるために、教員にできることは何でしょうか。このセッションでは、留学生の特色や留学生相談室に寄せられる相談の特徴、京都大学における支援体制などをご紹介します。さらにディスカッション形式で皆さんのご経験も共有していただき、より多くの疑問を解決していけたらと思います。	鈴木特定研究員
研究室運営を考える	学際融合教育研究推進センター 准教授 宮野 公樹	教員にとっての研究推進の場、そして人材育成の場である研究室。研究室を研究と教育の原動力として機能させるにはどうしたらいいでしょうか。PI (Principal Investigator) 各々のやり方があるとは言え、この機会に一度考えておくのも大事かと思えます。いくつかの事例と調査結果を紹介いたします。	岡本特定講師
困難を抱えた学生に向き合うには	学生総合支援センター カウンセリングルーム講師 和田 竜太	修学上、研究指導上の不適応を起こした学生・院生に対し、教員はどう向き合えばよいのでしょうか。学生のその後の人生を大きく左右する時期に関わっていることを意識し、可能な対応を探るにはどうすればよいでしょうか。今回は様々な不適応の様相の紹介と「困難」を知る、あるいは気づくための話の聞き方を体験・実習したいと思います。	勝間特定助教
アクティブラーニング型授業をやってみよう	薬学研究科教授 山下 富義 高等教育研究開発推進センター 教授 松下 佳代	2018年度から薬学部では、アクティブラーニングを取り入れた授業(講義を聴くだけでなく、話す、書く、発表するなど学生側の能動的な参加を含む授業)に取り組んでいます。その中で、学生たちは能動的に参加するだけでなく、協働で深く学ぶ姿勢を身につけてきています。このセミナーでは、その授業で使っているさまざまなやり方、技法を実際に体験していただきながら紹介します。オンライン形式だと少々制限がありますが、基本的な概念や技法は理解いただけるかと思えます。アクティブラーニングについて全く初めての方でもお気軽にご参加ください。	長岡研究員
これからのオンライン授業を考える	高等教育研究開発推進センター 准教授 田口 真奈 酒井 博之 情報環境機構教授 梶田 将司	昨年度より、授業におけるICT活用を余儀なくされ、そのタイミングで初めてPandAを使った、という先生も多いのではないのでしょうか。コロナ禍が過ぎ去った後も、対面授業に加えてICTを活用することで、授業準備を効率化したり、教育効果をあげたりすることができます。また、京都大学が取り組んできたOCW、MOOC、KoALA(京大のSPOC)を通して、先生の授業を学外に発信したり学内の授業で活用することもできます。本セッションでは、学内のオンライン授業のグッドプラクティスやICT活用事例を紹介し、これからのオンライン授業について考えたいと思います。	シング特定助教
Internationalization of Japanese higher education and Kyoto University's endeavors	教育学研究科教授 高山 敬太	This session offers an opportunity to learn about the Japanese government's higher education internationalization policies and Kyoto University's relevant endeavors. It should help you consider your role as an international faculty member and the English-medium courses for which you may be responsible. It also discusses some of the challenges faced by Japanese universities, including Kyoto University in their efforts to internationalize their campuses and curriculums. The session will be interactive and invites the participants to share their aspirations, concerns and experiences.	佐藤准教授

## (2)参加者からの評価

セミナー参加者に対して、セミナーに対する意見・感想を問う事後アンケートを行いました。その結果、101名より回答が得られました。

### ①プログラムの有意義度

プログラム全体の有意義度について、全体の総合評価としては、9割の参加者が非常に有意義あるいはまあまあ有意義であったとの評価をしました。それぞれの講義や第2部のグループ別セッションについても、7割以上の参加者より、有意義であったとの評価を得られました(図1)。具体的なデータや経験談、実践的な情報を得ることを通じて、京都大学での教育活動や教員としての役割について考える場になったようです。

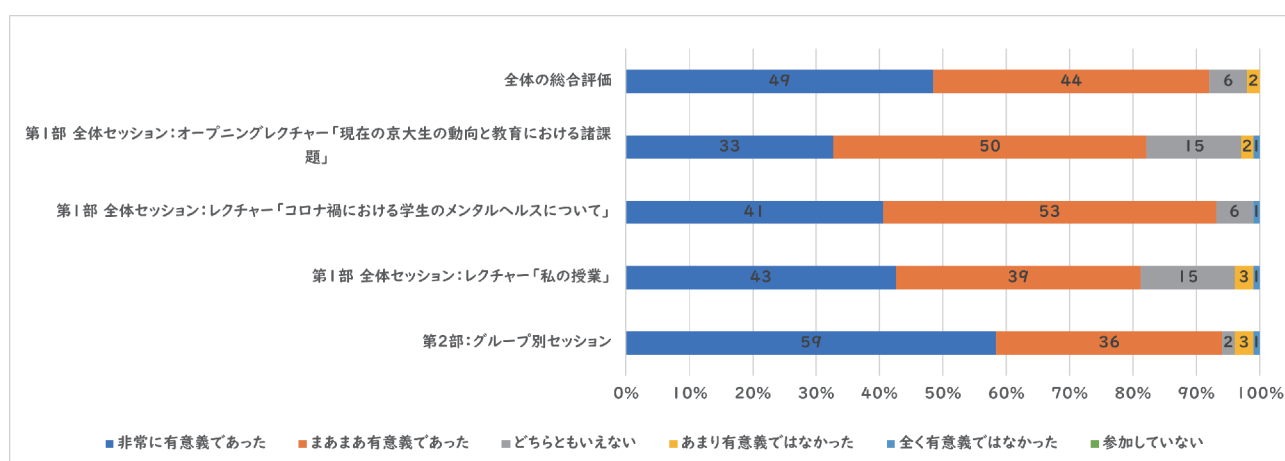


図1 参加者のプログラムに対する有意義度(図中の数値はN)

### ②プログラム全体・グループ別セッションで追加すると良いと思われるもの、よかった点、改善点等

事後アンケートにおいて、様々なご意見やご感想をいただきました。自由記述からは「第2部について複数のセッションに参加できるようにしてほしい」、「他部局の教員との交流の場となった」、「具体的な手法を学ぶことができよかった」「フランクな雰囲気ですぐに力を抜いて参加できてよかった」といった評価をうけました。今後について、取り上げて欲しいテーマには、学生が求めている教育や教員に対する要望、オンライン授業、ハラスメント対応、教育活動に関する教員間の調整などがあげられました。開催形態についてはフルオンラインでの開催を希望する回答が5割、オンラインでも対面でも参加できるように希望する回答が3割ありました。開催時期については、8月・9月での開催を求める声が一番多くきかれました。一方、改善点としては、一部、第2部のセッションタイトルの見直し(タイトルから想定される内容と実際の内容との齟齬)、全体の時間の短縮、分野によって異なる状況を踏まえた内容設定などが指摘されました。いただいた意見も参考にしながら、今後もよりよいプログラムになるように改善していきたいと思えます。

(佐藤 万知・勝間 理沙)

### 3. プレFD

#### (1) 大学院生のための教育実践講座

本講座は、将来、大学教育に携わりたいことを希望する京都大学の大学院生(OD・PD・研修員などを含む)のために、ファカルティ(大学教員)へと自己形成していくきっかけとなる場を提供するプログラムです。2021年度は、8月24日(火)に開催されました。17回目となる今回は、前回に引き続き、コロナウイルス感染症拡大防止のためオンライン(ZOOMを利用)での開催となりました。

今回は、英語部会を創設するとともに、資料を日英併記とするなど、日頃英語でコミュニケーションを取っている留学生や外国人研究者の方にとっても、参加しやすい仕立てとしました。

当日は、さまざまな専門分野から54名が受講しました。うち英語部会への参加者は17名でした。講座内では、大学教育の現状をおさえるための基本的な講義、それをもとに4つのテーマに分かれて大学教育実践について検討するためのグループワーク、京都大学大学院を修了した若手研究者による、授業実践に関する講義といった多様なプログラムのもと、受講生それぞれが「大学でどう教えるか」という問いに対して考えを深め、また、参加者同士で意見交換しました。全てのプログラムに参加した受講生には総長名の修了証が授与されました。

研修会直後にアンケートを実施し、プログラム全体に対する満足度を5件法(1:まったく満足していない~ 5:非常に満足している)で評価してもらったところ、満足度の平均は4.5と、オンライン開催ながら高い値でした。参加前後における大学教育に対する問題意識の変化を聞く質問(自由記述)では、「ディスカッションの時間がしっかりととられており、主体的に参加することができた」「議論により、アクティブラーニングの理解が深まりましたし、今後の自分の授業にも活かされそうなアイデアをたくさん得ることができました」「I have learned a lot from the workshop. The lectures were kind and supportive.」「I am very happy to have attended the course and learn some new ideas for teaching, especially for Japanese students at the university level.」といった回答がありました。受講者それぞれの視点から、未来のファカルティの一員として、大学教育に対する考えを深める良い機会となったようです。

● 大学院生のための教育実践講座

<https://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/prefd/study/index.html>

(松下 佳代・鈴木 健雄)

2021年度のプログラム	
10:00~	開会式 挨拶: 平島 崇男(教育・情報・図書館担当理事) 趣旨とプログラムの説明: 鈴木 健雄(高等教育研究開発推進センター特定研究員)
10:20~	セッション1 ミニ講義1「いま大学にもとめられていること」: 松下 佳代(高等教育研究開発推進センター教授)
10:40~	セッション2 グループ討論1: 4つの部会に分かれて議論 ①「アクティブラーニング」(岡本 雅子)、②「多様性」(勝間 理沙)、③「授業デザイン」(長岡 徹郎)、 ④「Workshop in English: Designing a Course」(佐藤 万知)
12:00~	休憩 Zoomはオフにし、各自でランチ
13:00~	セッション3 ミニ講義2「学生が学びたい授業」: 田中 一孝(桜美林大学准教授)
13:30~	セッション4 グループ討論2: 上記の4つの部会に分かれて、さらに深く議論
15:00~	セッション5 グループ討論3: 部会ごとにグループ討論の整理と発表
16:30~	休憩
16:40~	セッション6 ラップアップ: 各部会から1人ずつ出てグループを構成し、議論や成果を共有する。
17:20~	閉会式 挨拶・修了証授与: 飯吉 透(高等教育研究開発推進センター長・教授)



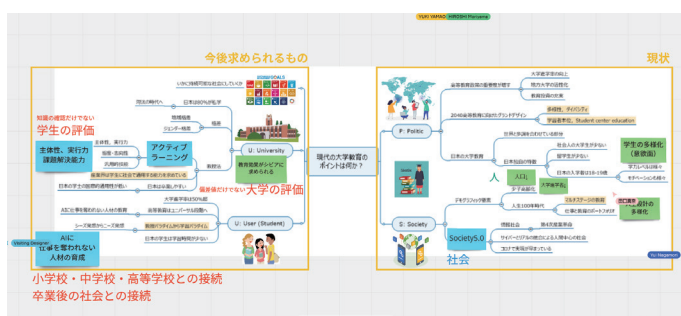
## (2) 大学院横断教育科目群「大学で教えるということ」

京都大学では、研究科や専門職大学院での高度な専門教育に加えて、研究科等を横断する教育プログラム(研究科横断型教育プログラム)を2009年度から実施してきました。2018年度からは当該プログラムを改編して、研究科等が開講する科目の中で、他大学院学生の履修にも配慮され、多くの専門分野の共通基盤となりうる科目、多数の研究科等の大学院生が受講するに相応しい横断的な教育内容の科目をまとめ、「大学院横断教育科目群」として履修できるように整備されました。

その中の「キャリア形成系」(従来は「マネジメント・キャリア・研究者倫理科目群」)の科目として、将来大学で教育職に就くことを希望する大学院生向けの科目「大学で教えるということ」(後期集中講義)を提供しています。「大学院生のための教育実践講座」は、講義とディスカッションが主体の入門的な内容になりますが、本授業は実際の授業をデザインし、模擬授業やピアレビューを行うなど、実際に授業を実践するうえでの基礎となるスキルの育成を含めた応用的な位置づけになっています。本授業の到達目標は以下の通りです。

- (1) 大学教育の現状を知り、理解すること
- (2) 授業デザインに関する基本的な知識を知り、理解すること
- (3) 効果的な授業デザイン(到達目標・評価方法)を作成すること
- (4) 多様な授業方法を知り、活用方法を計画すること
- (5) 模擬授業・検討会を通じて、授業実践の技能を磨くこと
- (6) グループでの協同作業に積極的に関わること
- (7) 自身が大学で教えることに関する広い視野と具体的なイメージを持つこと

2021年度は2月7,8,9日の3日間で実施されました。今年度も新型コロナウイルス感染症蔓延のため、フルオンライン授業で開催されました。また、今年度から英語での受講に対応し、授業資料の英訳を用意し、授業ではZoomの通訳機能などを活用し日英同時に実施しました。受講生は日本語話者が12名、英語話者が3名で、修士課程から博士後期課程まで幅広い大学院生やポストドクターが受講しました(教育学研究科3名、理学研究科1名、医学研究科2名、工学研究科1名、農学研究科2名、エネルギー科学研究科1名、地球環境学堂1名、経営管理大学院4名)。



オンラインツールやZoomのブレイクアウトルームを使用し、さまざまな形でディスカッションを行いました。そして、グループに分かれて、1つの科目を想定してシラバスと授業をデザインし、模擬授業を行いました。終了後のアンケート(15名全員回答)では、「学生自身に考えさせる工夫がされていた(平均4.0)」、「授業内容は(研究科・文理・分野を)横断するものであった(3.8)」、「自分の将来の進路に役立つ内容だった(3.9)」、「今後の学習のために必要な知識が身についた(3.9)」、「総合的に、自分にとって意味のある講義だった(3.9)」(いずれも4段階評定:最大値4)など高い評価が得られました。自由記述からは、「講義を設計する上で、非常に、すごく、本当に役に立ちました。また、先生たちの和気あいあいと進めてくださる雰囲気も良かったです。他の学生にも受講をお勧めする科目として伝えたいです」、「授業の内容や進め方も面白く大変勉強になりました。海外のゲストが居たのも新しい授業の進め方という感じがとてもワクワクしました」、「集中講義形式でディスカッションも多かったのが結構疲れましたが、専攻分野や学年、社会人経験の有無など様々なバックグラウンドの方々たくさん意見交換できたので、非常に有意義な3日間となりました。今までなんとなく受けてきた授業もありましたが、その背景に多くの準備や工夫が盛り込まれていたことに気づき、『授業』に対する見方が変わりました」、「The course has been very useful for me and helped me to create syllabus and class design, plus given me information on important points to consider when designing syllabi and lessons. Also, it was helpful to have feedback on presenting a topic to non-English speakers so that I am aware of cultural differences and teaching styles」といった様々な声が聞かれ、受講生にとって有意義な時間となったことがうかがえました。



和気あいあいと進めてくださる雰囲気も良かったです。他の学生にも受講をお勧めする科目として伝えたいです」、「授業の内容や進め方も面白く大変勉強になりました。海外のゲストが居たのも新しい授業の進め方という感じがとてもワクワクしました」、「集中講義形式でディスカッションも多かったのが結構疲れましたが、専攻分野や学年、社会人経験の有無など様々なバックグラウンドの方々たくさん意見交換できたので、非常に有意義な3日間となりました。今までなんとなく受けてきた授業もありましたが、その背景に多くの準備や工夫が盛り込まれていたことに気づき、『授業』に対する見方が変わりました」、「The course has been very useful for me and helped me to create syllabus and class design, plus given me information on important points to consider when designing syllabi and lessons. Also, it was helpful to have feedback on presenting a topic to non-English speakers so that I am aware of cultural differences and teaching styles」といった様々な声が聞かれ、受講生にとって有意義な時間となったことがうかがえました。

(勝間 理沙・松下 佳代・田口 真奈・佐藤 万知)

### (3) 文学研究科プレFDプロジェクト

文学研究科プレFDプロジェクトは、文学研究科のOD/PDを対象とするもので、2009年度から実施されています。各授業のあとに担当講師と他の講師、コーディネーターを交えた検討会を実施することと、前期開始前に事前研修会を、年度末に事後研修会をそれぞれ実施することが特徴です。所定の条件を満たした参加者には、京都大学総長よりプロジェクトの修了証が授与され、すでに186名が修了証を得ています。

2021年度は、文学研究科よりコーディネーター4名、教務補佐員2名、講師10名が参加し、本センターより5名がこれをバックアップする形で、哲学基礎文化学系と基礎現代文化学系の2つのリレー講義が展開されました。本センター主導で実施する事前研修会並びに事後研修会はオンラインで実施されました。今年度のプロジェクトの対象授業は、前期のみの開講であり、本学の方針に沿った形で、オンラインまたは対面、ハイブリッド型で実施されました。

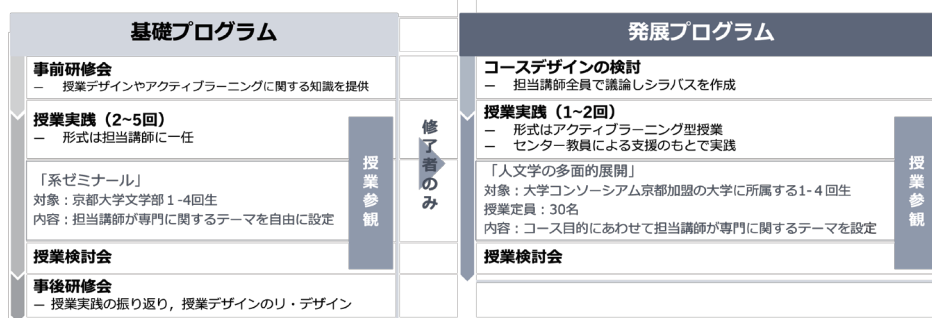
本授業は公開授業となっており、学内教職員の参観が可能です。日程などの詳細は、以下のHPをご覧ください。

● 文学研究科プレFDプロジェクト

<https://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/prefd/literature/>



(鈴木 健雄・田口 真奈)



文学研究科プレFDプロジェクトの流れ

### (4) 人間・環境学研究科「教養教育実習」事前講座

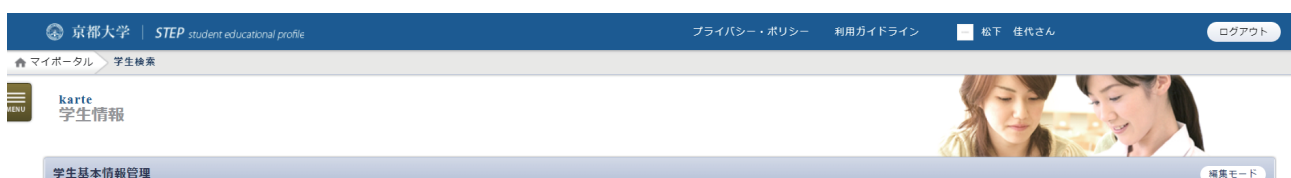
「教養教育実習」は、人間・環境学研究科の博士後期課程学生が、指導教員の担当する全学共通科目のうちの1コマを担当することにより、「自分の研究分野の内容を初学者にわかりやすく伝える能力」を育成しようとするものです。特に、大学教員を目指す大学院生にとっては、研究者としての力量のみならず、教育者としての力量を培う機会にもなっています。

この事前講座は、「教養教育実習」を行う大学院生が、授業のデザイン・実施に関する基礎的な知識・技能を習得することを目指しています。目標としては、①大学教育の現状を知る、②授業デザインに関する基本的な知識を得る、③多様な授業方法を知り、それを活用する、④自身が大学で教えることに関する広い視野と具体的なイメージをもつ、の4点を掲げています。

本講座は、人間・環境学研究科からの依頼により2020年度から始め、前期・後期に各1回行っています。ちょうどコロナ禍と重なってしまったために、今まで4回の講座は、残念ながらすべてオンラインでの実施となりました。今年度は、前期を5月7日、後期を9月29日に実施し、それぞれ27名、7名の参加がありました。

学生には事前学習を求めるとともに、講座の修了後には、STEP(Student Educational Profile)に本講座で学んだことがらに関するレポートを記入してもらい、授業者である松下が承認するという手続きを踏んでいます。

STEPは、京都大学の複数の学部・学科、大学院、部局横断型プログラムで使われているe-Portfolioシステムです。e-Portfolioとしては非常にシンプルな構成ですので、今後は、学生が、自分の成果物(レポート、動画など)や成績など、自らの学習の軌跡を残していけるようなものに拡張されていくことが望まれます。



(松下 佳代)

(5)大学コンソーシアム京都・単位互換リレー講義

本プログラムは、文学研究科プレFDプロジェクト修了後の発展的プログラムとして、文学研究科と本センターが協力し、大学コンソーシアム京都との連携のもと提供するものです。前身のプログラムが2015年度に開講されて以来、7年間にわたって開講されてきました。開講にあたっては本センターが支援を行っています。京都大学の学生を含む、大学コンソーシアム加盟校の学生を対象とした単位互換科目で、リレー講義形式で行われます。本年度は、10大学から39名が受講しました。

本プログラムでは、参加する若手講師たちが、個々の担当授業だけでなく半期15回の講義全体をデザインするという経験を積むことに主眼がおかれています。そのため、プログラムは開講の前年からスタートします。そこで、各自の担当授業と全体目標とのすりあわせを行いながら、シラバスを作成するとともに各授業の構想を練ります。また、授業の1週間前にはそれぞれが翌週の授業の概要を持ち寄り、全体の到達目標を見据えつつ、各自の授業目標を確認、そのための具体的な授業デザインを検討し合っています。

2021年度の開講テーマは「人文学の多面的展開：「不健全」の何が問題なのか?」でした。本年度はオンライン授業と対面授業とをくみわけて実施する「ハイブリッド型」での開講となりました。コーディネーター1名のもと、哲学、倫理学、社会学、心理学、歴史学といったさまざまな専門分野出身の若手講師7名が、対面とオンラインの双方の特性を活かしたアクティブラーニング型の授業を展開しました。アクティブラーニングを用いた授業を初めて経験するという講師もいましたが、本センターの教職員2名によるサポートを受けつつ、全員が知恵を出し合いながら授業デザインを検討・作成していきました。

受講生間のディスカッションを促すための工夫が凝らされた本授業を通じて、受講生はケアの倫理・権力の暴力性・人間の過ちやすさ・観光と歴史認識・ネットワーク分析などをテーマに、多様な観点から考察することで、ものごとを複眼的に捉えることの重要性について学びました。

● 文学部単位互換リレー講義「人文学の多面的展開」

<https://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/prefd/literature/consortium/>



(長岡 徹郎・田口 真奈)



オンライン授業の様子



受講生募集用ポスター



学生指導の様子



対面授業の様子



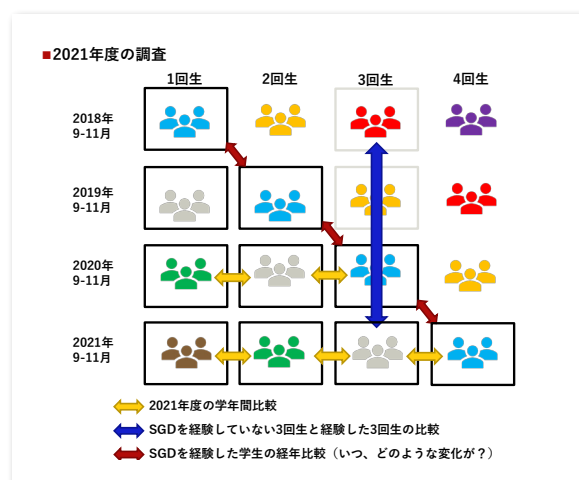
## 4. 他部局との連携

### (1) 薬学部との連携

京都大学薬学部では、2018年度に実施されたカリキュラム改革によって、少人数で行うアクティブラーニングを積極的に導入し、学生の課題発見・問題解決能力を低学年から育成することになりました。このアクティブラーニング科目のうち最初に行われるのが、1年前期の「薬学研究SGD演習」(SGDはSmall Group Discussionの略)です。この科目では、非言語的コミュニケーション、ロジカルシンキング、医療・生命倫理などが講義とディスカッションを通じて学ばれ、ディベート、研究室訪問などの活動も行われています。2020・2021年度はほとんどがオンラインになりましたが、無事実施されました。

このような授業改善の効果検証のために、学生の学習や生活の実態に関する調査・分析をこの4年間行ってきました。調査は質問紙調査で、薬学部の学生がふだんどのように学習を行っているのか(学習時間、学習コミュニティなど)という側面から、さまざまな能力の獲得感、研究マインド、教員との親密感や所属意識まで、大学生の学習において近年重要視されている幅広い指標を用いています。調査対象は2018年度が1・3回生で、そこから対象学年を増やしながら毎年実施し、横断調査と縦断調査(パネル調査)の特徴を備えたものになっています。また、昨年度は、コロナ禍の影響により、経年比較が困難でしたので、学力レベルの異なる6名の学生に対してインタビュー調査も実施しました。

本調査の結果は、薬学部にてフィードバックするとともに、薬学部の先生方とともに大学教育研究フォーラムで研究発表を行ってきています。



- 杉山芳生・松下佳代・高須清誠・山下富義・津田真弘(2021)「京都大学薬学部における初年次アクティブラーニング科目『薬学研究SGD演習』の3年目の効果検証」第27回大学教育研究フォーラム など

また、この授業でのアクティブラーニングのノウハウについては、新任教員教育セミナーでも全学の新任教員に共有しています。

(松下 佳代)

### (2) 医学教育・国際化推進センターとの連携

医学教育・国際化推進センターでは、2016年度から、文部科学省課題解決型高度医療人材養成プログラムとして「現場で働く指導医のための医学教育学プログラム(FCME)一基礎編一」(<http://cme.med.kyoto-u.ac.jp/fcme/>)を提供しています。このプログラムは、学生や研修医に対して指導経験のある医師を対象に「指導医」の養成をめざすもので、医学教育学全般の知識を習得することで、自身や自施設の教育活動を省察し、改善できるようになることを目標としています。毎年、全国から12名程度の医師が参加し、年3回の参加体験型学習(3泊4日)、および月2回のWeb討論型学習(1回2時間)を通して1年間学びます。「医療・教育を『社会的共通資本』として捉え、暴走する新自由主義と正当に対峙する」など明確でユニークな思想・哲学を持ち、医学教育学の理論にもとづく最新の内容・方法を具体化したプログラムです。

2019年度から文科省の指定が外れましたが、自立したプログラムとして継続されています。本センターからは、「カリキュラム開発:カリキュラムを創る・壊すー自由な学びの場の構築」に松下が講師として参加しています。月2回のWeb討論型学習は、12名を2グループに分けて、勤務後(19~21時、または20~22時)に行われますが、ミニ講義と事前課題(職場でのカリキュラムづくり)をもとにした討論は、時間を忘れるほどです。また、2020・2021年度は、参加体



験型学習がオンラインに切り換えられましたが、その分、PandAなどを使ったオンライン・コミュニティの活動は活発になっています。修了生がこのプログラムの講師を務めたり、上級編が始まるなど、新たな展開も見せています。

2019年には、これまでの実績をもとに、錦織宏・三好沙耶佳編『指導医のための医学教育学—実践と科学の往復—』（京都大学学術出版会）という教科書も刊行されました。社会人の学び直しが、大学・大学院教育の大きな課題になっている現在、国内外で勤務する医師を対象に、Web授業と経験学習を組み合わせた密度の濃いプログラムを実現した例として、とても参考になる取り組みです。

(松下 佳代)

### (3) 図書館学習サポートデスクとの連携

附属図書館では、「学習サポートデスク」を設置し、留学生を含む大学院生を学習サポートスタッフとして雇用し、学習相談や講習会活動等を行っています。本事業は、2013年に附属図書館ラーニング・コモンス内に学生によるピアサポートを活用した学習支援として始まった活動を継承しつつ、2016年度に、新たに、国際化・多様化する学生への支援という目的を持ったサポートデスクとして活動しています。活動としては、学習相談や所蔵調査、図書館の利用指導などの学習サポートや、留学生を対象とした図書館ツアー、レポート執筆講座、プレゼンテーション講座、中国語・韓国語・インドネシア語など多言語による研修など多様な内容の支援を提供しています。2021年度は、9研究科より10名の大学院生(内5名が留学生)が学習サポートデスクスタッフとして活動しています。

附属図書館による調査では学習サポートデスクの活動自体は、学生にピアサポートの場として認知されており、スタッフとして活動する大学院生自身には、やりがいがあり学びの多い経験となっていることが確認されています。しかし、より多くの学生に活用してもらえるようなサポートデスクにすることを目標に、今後の方針について話し合い、その活動を実施するために学習サポートデスクスタッフに必要な研修について検討することになりました。

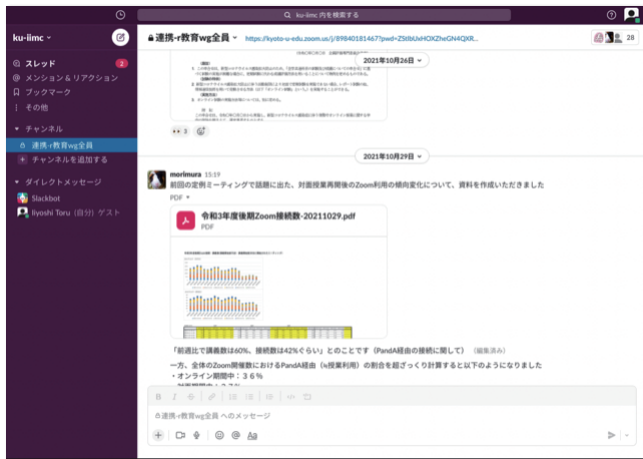
	月	火	水	木	金
	1/10	1/11	1/12	1/13	1/14
13:00-16:00	閉館	閉館	閉館	閉館	閉館
16:00-19:00	吉田南	吉田南	吉田南	閉館	閉館
	1/17	1/18	1/19	1/20	1/21
13:00-16:00	吉田南	吉田南	吉田南	吉田南	吉田南
16:00-19:00	閉館	閉館	閉館	閉館	閉館
	1/24	1/25	1/26	1/27	1/28
13:00-16:00	閉館	閉館	閉館	閉館	閉館
16:00-19:00	吉田南	吉田南	吉田南	吉田南	吉田南
	1/31	2/1	2/2	2/3	2/4
13:00-16:00	吉田南	吉田南	吉田南	吉田南	吉田南
16:00-19:00	閉館	閉館	閉館	閉館	閉館

そこで、教育アセスメント室より佐藤・勝間・大野がファシリテートとなって、学習サポートスタッフを対象とした、活動に関する振り返りと学習サポートデスクに期待する役割について話し合うワークショップを実施しました。はじめに、どのような動機で学習サポートデスクスタッフに応募をしたのかを共有してもらいました。図書館の使い方を自分自身も学びながら働くこともできるという利点以外に、学部時代に他大学で類似の活動に参加しており意義を感じていたこと、教えることが好きで先輩としてできることをしたいと考えていること、少しでも困っている留学生のサポートをしたいと考えていること、というような理由があげられました。その後、それぞれがどのような考えをもって学習サポートに関わり、どんな場にしていきたいのか、ということについて想いの共有や多くの提案がなされました。例えば、留学生に対しては、留学生ラウンジ「きずな」との連携や、さまざまな研究分野についてふれディスカッションをする研究交流の場の提供といった意見について話し合いました。その中から、学習サポートデスクの存在について知ってもらうことを目的に、1・2年生に馴染みのある吉田南総合図書館に臨時窓口を設置することになりました(2022年1月11日~2月4日)。これからの活動の新しい展開が楽しみです。

(佐藤 万知)

#### (4)情報環境機構との連携

コロナ禍における本学でのオンライン授業・ハイブリッド授業実施のための全学的な支援は、2020年3月に教育担当理事・副学長の統率の下で、情報環境機構と本センターによって開始されました。それ以前も、MOOC・SPOC・OCW・PandA等の基盤整備や活用支援に際して両部局は必要に応じて連携・協力していましたが、コロナ禍をきっかけに両部局の協働体制は強化され、Slackによる日常的な情報交換や2～3週間毎にZoomによる連絡会議を、学術情報メディアセンターからのオブザーバー的な参加も得つつ、開催してきました。



2021年初頭のオンライン授業・ハイブリッド授業に関する教員調査(「授業実施に関するアンケート調査」、[https://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/connect/teachingonline/report\\_survey\\_onlineteaching\\_AW2020.php](https://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/connect/teachingonline/report_survey_onlineteaching_AW2020.php))の実施も、この連携を通じて行われたものです。

このような本センターと情報環境機構の連携・協力は2021年度も不断なく継続され、本学のオンライン授業・ハイブリッド授業やICTの教育活用の支援のより一層の拡充に、本Annual Reportでも報告されている学内講習会の開催やCONNECT・Teaching Online@京大等の支援リソースの制作・公開等を通じて貢献してきました。

(飯吉 透)

#### (5)経営管理大学院との連携

経営管理大学院の山内裕教授が代表を務める「京都流歴史的価値創造人材育成プログラム」が文部科学省大学等における価値創造人材育成拠点の形成事業に採択されました。本プログラムは、社会人を対象とし、歴史を作るイノベーターを育成する創造性プログラムで、2022年度よりプログラムを開始する予定です。今後、京都大学、京都市立工芸大学、京都工芸繊維大学の3大学を中心に、企業、行政、経済団体との連携のもとで実施されます。

本プログラムには、本センターからは飯吉透教授、酒井博之准教授が参加しており、主にオンライン授業の開発や実施に関して支援していきます。

**「歴史を作る」とはどういうことか?**

それは、過去に目を向け、現在を読み解き、新たな表現を通して時代を切り開くことだ。新奇のアイデア発想に固執し、響きのいい未来を空想するだけでは真のイノベーションは導けない。いま求められているのは、歴史の流れを捉え、社会の方向性を変えていけるような力強い創造性である。

プログラムウェブサイト <https://assemblage.kyoto/> より

価値創造人材育成プログラム  
**Kyoto Creative Assemblage**

Prolegomena  
Session 1  
新しい創造性—歴史をつくる

12.02 (Thu.) 18:30~20:00  
ZOOMで無料配信

▼ 概要  
京都の3大学が協力して作り上げるデザインアプローチとは？歴史をつくるとはどういうことか？なぜ歴史なのか？なぜ今？プログラムのコンセプトを説明し議論するとともに、3大学の代表がそれぞれの参加の経緯や期待について語ります。

▼ 登壇者  
山内 裕 / 京都大学経営管理大学院  
原田 明久 / 京都市立芸術大学  
水野 大二郎 / 京都工芸繊維大学  
佐藤 隆之 / 京都大学総合博物館(モデレーター)

開講プレイベントウェブ (<https://kca-pre2.peatix.com/>) サイトより

(酒井 博之・岡本 雅子)

## (6) 宇宙総合学研究ユニットとの連携

京都大学学際融合教育研究推進センター宇宙総合学研究ユニットでは、文部科学省宇宙航空科学技術推進委託費事業において、「有人宇宙活動のための総合科学研究教育プログラムの開発と実践(代表:土井隆雄)」(2019~2021年度)が進められてきました(2020年度からは運営主体は総合生存学館に移行)。このプログラムは、「有人宇宙活動のための総合科学研究プログラムの開発と実施(代表:土井隆雄)」(2016~2018年度、S評価にて終了)を発展させたもので、学部生を対象とした有人宇宙活動に関わる多様な学問分野を総合的に学ぶ既存の教育プログラムに加え、大学院生を対象とする宇宙滞在の人

への影響といった医学的観点からの専門的知識を習得し、社会との連携活動を実践する教育プログラムを構築するものです。

本センターは、宇宙総合学研究ユニットに併任教員として参画し、この教育プログラムのカリキュラムや評価のデザインに協力し、これまでに受講生に対するフォーカスグループ・インタビューの実施や、学習活動・学習評価としてのコンセプトマップの作成などを提案・支援してきました。

今年度、新たに、文部科学省宇宙航空科学技術推進委託費事業「人文社会×宇宙」分野越境人材創造プログラムにおいて、「倫理学を基盤とした宇宙人材育成プログラムの開発と実践(代表:嶺重慎)」(2021~2023年度)が採択されました。これは、本格化する人類の宇宙進出に伴い生じてきた、倫理的・法的・社会的問題に対して倫理学を基盤に解決することができるような人材育成を目的としたものです。

**講義(知識を習得)** : 宇宙に関する基礎知識を幅広く習得

**演習(スキルを磨く)** : クリティカルシンキングの手法に則り  
実践的問題に取り組む

**研究(判断力の涵養)** : 選んだテーマについて考究し発表

	学部1-2回生	学部3-4回生	大学院生
講義 (知識)	学部生向け 講義(文系)		院生向け 講義(文系)
	学部生向け 講義(理系)		院生向け 講義(理系)
演習 (スキル)	学部生向け 演習		院生向け 演習
研究 (判断力)	専門研究ゼミ		

・黒字は既存の講義(一部改変)  
・赤字は新設

図1: 教育カリキュラムの内容

宇宙総合学研究ユニットNEWS 2021年9月号より

[http://www.usss.kyoto-u.ac.jp/wp-content/uploads/2021/10/usss-news\\_202109.pdf](http://www.usss.kyoto-u.ac.jp/wp-content/uploads/2021/10/usss-news_202109.pdf)

この教育プログラムは文系・理系を問わず、それぞれの専門に加え、いわば副専攻として、宇宙倫理学に関する知識を得、演習によってスキルを身につけるもので、来年度から開始される予定です。具体的には、「科学哲学科学史特殊講義(宇宙倫理学入門)」や「宇宙総合学」といった学部対象の授業や、「宇宙学」などの大学院対象の授業に加え、演習や、専門研究ゼミという宇宙ユニット独自の教育活動からなります。修了者には、宇宙ユニットから修了証が発行されます。

本センターは教育プログラムの評価を担当しています。今年度は各授業や、教育プログラム全体の評価計画を策定するため、特にポートフォリオ導入や各授業の評価をどのように行うかなどについて検討を重ねています。

(田口 真奈)



## 5. 高等教育研究開発推進センターウェブサイト

本センターのウェブサイトは、クリエイティブコンセプトを「RE:EDit(リエディ)」とし、編集を軸にした情報発信メディアのようなサイトを目指しています。

本ウェブサイトの特徴としては、教員の抱える悩みや教育改善の工夫などを集約し、より双方向的なものにしたいと考え、①必要な人に必要な情報を届けるための情報設計、②発信した情報を元に、教員との交流を促しPDCAを回す仕組みを構築することが挙げられます。日本語サイトと同様の英語サイトも公開しており、京都大学の教員だけでなく、国内外の教育関係者にも広く見てもらうことができるようにしております。

2021年度(2022年1月現在)のユーザー数は31,665名(2017年度15,925、2018年度23,567、2019年度21,611、2020年度24,903)、ページビュー数は64,847(2017年度56,531、2018年度63,537、2019年度51,598、2020年度56,273)で、ともに昨年度より増加傾向にあります。とりわけ、2019年9月にリニューアルをした「ASAGAOメーリングリスト」については、ページビュー数が増加していました(表1)。

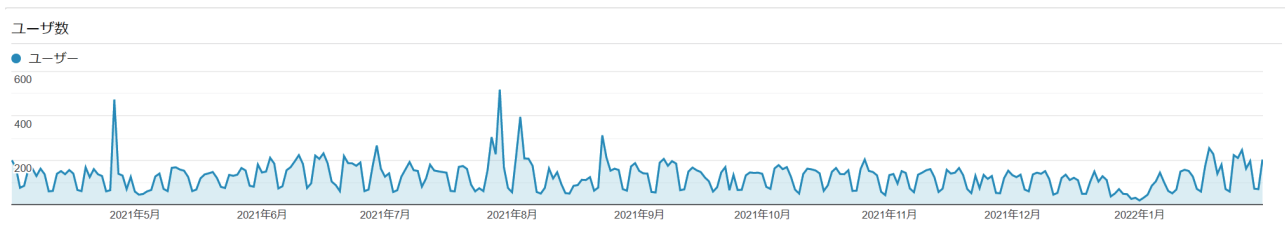


図1 2021年度ユーザー数の推移

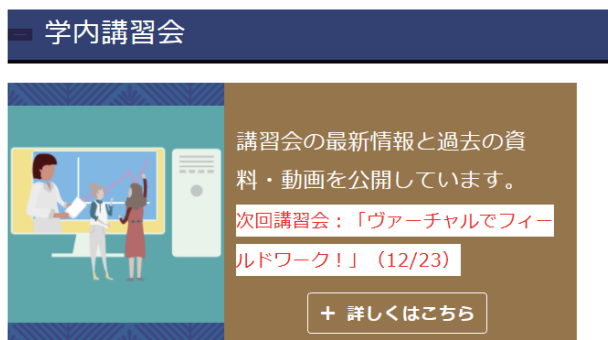
表1 2021年度ページビュー数(全ページ)

2021年度		2020年度	
ページ名	ページビュー数	ページ名	ページビュー数
トップページ	18,659	トップページ	18,015
ASAGAOメーリングリスト	14,720	ASAGAOメーリングリスト	10,798
教育アセスメント	5,983	カリキュラムデザイン	3,503
カリキュラムデザイン	3,742	授業のデザイン・方法	3,020
授業のデザイン・方法	2,668	教育アセスメント	2,949
スタッフ紹介	2,578	スタッフ紹介	2,431
高等教育学コース	2,039	高等教育学コース	1,844
京都大学のFD	1,555	京都大学のFD	1,292
教育・学習へのICT活用	1,525	教育・学習へのICT活用	1,126
出版・刊行物	859	出版・刊行物	870

今後も京都大学の教員のみなさんが、オリジナルの教育手法について考える上でのきっかけとなるような情報を発信したり、また授業構成を考えるヒントを探す上で有益なベテラン教員のインタビュー記事を掲載したり、現代日本の高等教育について考えるフォーラム等の情報が見えるようなサイトとして活用していただけるよう、アップデートしていく予定です。ぜひ、本ウェブサイトを訪ねていただき、ご質問やご要望、情報提供などいただけると幸いです。

(岡本 雅子)

## 6. オンライン/ハイブリッド型授業を支援するための学内講習会



### コロナ禍への大学の対応とその支援

本センターでは、昨年度に引き続き、今年度も、オンライン/ハイブリッド型授業を支援するための学内講習会を行ってきました。本センターの授業支援で大きな役割を果たしたのが、サポートサイト「Teaching Online@京大」と学内講習会です。すべての講習会は録画され、資料とともにTeaching Online@京大の「学内講習会」のページ (<https://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/connect/teachingonline/guidances.php>) にアップされています。

今年度の講習会は、新型コロナウイルス感染状況(図1)とそれへの大学の対応を見ながら、そのつど必要な支援を行うようにしてきました。授業方針を決定した2021年2月頃は、第3波が終わって感染状況がやや落ち着いていたこともあり、新年度の授業は、「原則、対面授業」ということで始まりました。例えば、大規模授業で、対面ではソーシャルディスタンスを確保できない場合はオンライン授業となりました。また、「来日できない留学生、基礎疾患等によりキャンパスでの対面授業を受講できない学生には、オンラインでの対応」が求められることになりました。そういう学生がいる授業では、「ハイブリッド型授業」が必要になり

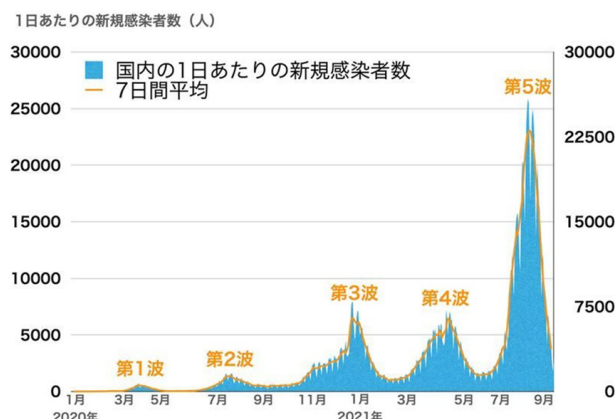


図1 新型コロナウイルス新規感染者数の推移

(出典) 忽那賢志「新型コロナ第5波を振り返って」Yahooニュース、9月30日



ます。ハイブリッド型授業には、以下のような3つの方法がありますが、特に実施が難しく、支援が求められたのは、「ハイフレックス型授業」でした。

#### ◇ ハイブリッド型授業の3つの方法

- ①ハイフレックス型： 同じ内容の授業を、対面とオンラインで同時に行う授業方法
- ②ブレンド型： 対面とオンラインを、教育効果を考えて組み合わせる授業方法
- ③分散型： 同じ回に異なる内容の授業を対面とオンラインで行い、学生は分散して受講する授業方法

(出典)「ハイブリッド型授業とは」(Teaching Online@京大) (<https://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/connect/teachingonline/hybrid.php>)

しかし、その後、第4波の影響により、4月22日からはオンライン授業となり、第4波が下火になった6月21日より再び対面授業となりました。第5波はすさまじいものでしたが、ほぼ夏休みと重なったため、大学授業はそれほど大きな影響は受けず済みました。後期は、最初はオンライン授業でしたが、10月22日から、「原則、対面授業」になり、現在にいたっています。

### 今年度の講習会の特徴

昨年度はニーズに応じて講習会を開催するなかで、以下の6つのシリーズが生まれました。

- ・ハイブリッド型/オンライン授業に関する講習会・相談会(15回)
- ・私のハイブリッド型/オンライン授業@京大(12回)
- ・ミニディスカッションフォーラム「今、京大の学生に必要な支援・配慮を考える(6回)
- ・TA講習会(3回)
- ・こんなこともできる!オンライン授業(3回)
- ・ポストコロナの大学授業(3回)

講習会はあわせて42回に上り、参加者数はのべ3,836名、動画視聴数も現在までに4千回近くになっています。回数の内訳を見るとわかるように、基本的にハイブリッド型/オンライン授業の方法をセンター教員が講習したり、教員同士でそのノウハウを共有するというのが主でした。

今年度の学内講習会は1月末現在で、計17回、参加者数1,329名、動画視聴数659回となっています(表1)。昨年度に比べるとペースダウンしましたが、それでも月に1~3回は開催してきました。

今年度の特徴は、年度当初は、ハイブリッド型授業(特にハイフレックス型授業)に関するものが多く、後半は「ポストコロナの大学授業」が続いたことです。一方、昨年度最も多かった「私のハイブリッド型/オンライン授業@京大」は1回に減りました。コロナ下で、京大の教員がオンライン授業のリテラシーを身につけ、複雑なハイフレックス型授業以外は、自分で回せるようになってきたこと、そろそろコロナ後を見据えて、対面とオンラインのベストミックスをどう追求するか、ということに教員のニーズや関心が変化してきたことを反映しています。

昨年度ほど回数は多くありませんが、途中途中に学生支援に関する「ミニディスカッションフォーラム」も差し込みました。授業は「原則、対面授業」になっても、サークルや部活動、友だちとの交流、海外研修など、学生生活のかなりの部分は制限されており、メンタルヘルス面で不調を訴える学生も少なくありません。3回のフォーラムではそうしたテーマを扱いました。

## 6つのシリーズ

### ■ ハイブリッド型授業講習会(3回)・TA講習会(2回)

昨年度から、この2つのシリーズは、主にセンターの教員・スタッフ

で行ってきました。今年度は、2回のTA講習会も含め、ハイフレックス型授業について扱いました。

私たちはハイフレックス型授業の方法を、さらに3つに分け、授業の規模、学生の参加の仕方、板書の有無などの条件に応じて、どれを選ぶのがよいのかを説明しました。

#### ◇ ハイフレックス型授業の3つの実施方法

- (a) 教室設備活用法: 教室のAV設備とノートPCを利用して実施する方法
- (b) iPad法: 三脚に立てたiPadを利用して、教室の様子と音声、オンライン参加者に届ける方法
- (c) BYOD法: 対面参加者全員が、ノートPCとマイク付きイヤフォンを持参し、オンライン参加者とともにZoomで授業を受ける方法

(出典)「ハイブリッド型授業とは」(Teaching Online@京大)

最も利用が多いと見込まれた(a)の教室設備活用法に関しては、大西琢朗先生に文学研究科での教室設備、大山豪さんに国際高等教育院での「ハイブリッド授業支援動画」についてご紹介いただきました(6/22)。

また、「教員調査からみえてきたコロナ下の京大の授業」(4/21)では、昨年度2回実施した教員調査の結果を紹介しました。コロナ下で教員はPandAやZoomを使いこなすようになったものの、授業準備、学生とのコミュニケーション、学生の理解度の把握を課題として認識していること、今後の授業形態としては対面もしくは対面とオンラインのブレンド型が支持されていることなどがわかりました(詳しくは、本レポートのIV-1をご参照ください)。

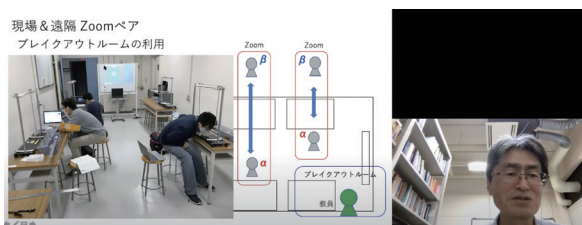
表1 オンライン/ハイブリッド型授業講習会(2021年度)

No.	日程	シリーズ名	副題またはテーマ	講師(所属・職階)	参加者数	視聴数
1	2021年3月29日	ハイブリッド型授業講習会(第2回)	基礎からわかるハイフレックス型授業の進め方	松下佳代・鈴木健雄(センター)	322	107
2	4月8日	TA講習会(第3回)	ハイフレックス型授業におけるTAの役割	松下佳代・佐藤万知(センター)	118	23
3	4月9日	Teaching Online Workshop for Faculty & TA	An Introduction to HyFlex Teaching	佐藤万知(センター)	47	17
4	4月21日	教員調査からみえてきたコロナ下の京大の授業	教員調査	佐藤万知(センター)	92	37
5	5月12日	私のハイブリッド型/オンライン授業@京大(第12回)	物理学実験でのオンライン授業の取り組み	高木紀明(人間・環境学研究所教授)	71	43
6	5月26日	こんなこともできる! オンライン授業(第4回)	PandAを使った課題提出・フィードバックのTips	喜多一(国際高等教育院教授)	87	69
7	6月10日	ミニディスカッションフォーラム(第7回)	再びオンライン授業になって、学生は今	杉原保史(学生総合支援センターカウンセラー)	86	40
8	6月22日	ハイブリッド型授業講習会(第3回)	ハイフレックス型授業をやりやすくする環境整備	山口真奈(センター) 大西琢朗(学際融合教育研究推進センター-人社未来形発信ユニット特定准教授) 大山豪(国際高等教育院教育課程掛長)	80	49
9	7月8日	ポストコロナの大学授業(第4回)	VR(仮想現実)技術を使った臨床実習の試み	山本憲(医学教育・国際化推進センター講師)	41	31
10	7月19日	ミニディスカッションフォーラム(第8回)	学生の国際経験を後押しする: OWLの取り組み	吉田万里子(国際高等教育院教授)	41	33
11	9月13日	ポストコロナの大学授業(第5回)	学生の手でPandAを使いやすく! Comfortable PandA	武田和樹(工学部電気電子工学科3年生)	64	36
12	9月21日	ポストコロナの大学授業(第6回)	学生のポスター発表を取り入れたドイツ語の授業	Luisa ZEILHOFER(国際高等教育院初級外国語教室特定講師)	27	32
13	10月8日	ポストコロナの大学授業(第7回)	基礎から学ぶインストラクショナルデザイン	平岡育士(熊本大学教授システム学研究センター准教授)	59	48
14	10月29日	ミニディスカッションフォーラム(第9回)	対面授業に戻って来た今、学生支援としてできること	山本憲(理学研究科・理学部相談室カウンセラー)	70	34
15	11月18日	ポストコロナの大学授業(第8回)	AI(人工知能)を教育改善に使ってみよう	美馬秀樹(学術情報メディアセンター特定教授)	42	30
16	12月13日	ポストコロナの大学授業(第9回)	AI(人工知能)を教育改善に使ってみよう(Part2)	美馬秀樹(学術情報メディアセンター特定教授)	38	12
17	12月23日	ポストコロナの大学授業(第10回)	ヴァーチャルでフィールドワーク!	福田栄治(ASEAN拠点所長)、園部大郎・斎藤知里(学術研究支援室主任専門業務職員(URA))	44	18

計 1,329 659

### ■ 私のハイブリッド型/オンライン授業@京大(1回)、こんなこともできる!オンライン授業(1回)

この2回では、オンライン授業の工夫や進化型についてお話しいただきました。人間・環境学研究科の高木紀明教授は、全学共通科目「物理学実験」での完全オンライン型(20年度前期)、ブレンド型(20年度後期・21年度前期)を例に、いかに感染リスクを低減しつつ実験科目としての意義を保つかについての試行錯誤を報告してくださいました(5/12)。また、国際高等教育院の喜多一教授は、対面になってからも要望の多い、PandAを使った課題提出と添削結果の返却の仕方について、先生が開発されたツールmksummaryのデモを行いながら説明してくださいました(5/26)。



高木教授のご説明の様子

### ■ ミニディスカッションフォーラム(3回)

今年度前期は対面で始まったのも束の間、4月下旬から再びオンライン授業になりました。そこで心配された学生のメンタルヘルスの問題について、学生総合支援センター・カウンセリングルームの杉原保史教授にお話しくださいました(6/10)。全学の学生22,000人のメンタルヘルスの問題は、カウンセリングルームだけで何とかできるものではなく、教員一人ひとりの意識や気づきが頼りだというメッセージが心に残りました。対面授業が再開し夏休みを

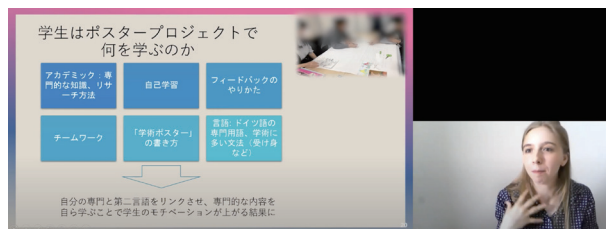


杉原教授の回でのやりとりの様子

迎える前(7/19)には、国際高等教育院の吉田万里子教授に、国際リーダーシップ強化プログラムOWL(Orientation for World Leadership)についてご報告いただきました。OWLは、国際交流の課外活動をポイント制にして、学生の自主的な活動を促していこうという取組です。OWL登録学生数はまだ494名(2.2%)にとどまっていますが、今後の発展が大いに期待されます。後期が始まり、対面授業が定常化した時期(10/29)には理学研究科・理学部相談室の山本齋さんに、話題提供していただきました。この相談室は、カウンセラーが常駐する学内初の部局内相談室(2012年設立)で、各専攻から1名の運営委員が出て協力体制が築かれています。「遠足」などユニークな活動が生まれ、コロナ下でもオンラインで継続されています。対面は難しいがオンラインなら授業に参加できるという学生もいること、まずは「学生の声を聞き、それに応える」のが学生支援のポイントであることが、胸に刻まれました。

### ■ ポストコロナの大学授業(7回)

このシリーズでは、多様な話者に登壇していただきました。9/13には工学部3年生の武田和樹さんに「Comfortable PandA」の開発について語っていただきました。学生自身が自分たちの学習環境の改善に取り組むというのはすばらしいことです。多くの学生が続いてくれることを期待します。9/21には、初めて外国人教員として、国際高等教育院のLuisa Zeilhofer特定講師にポスター発表を取り入れたドイツ語授業について報告していただきました。コロナ下でもオンラインで継続されています。初めて外国語の授業が面白いと思ったという医学部の学生の言葉が印象的でした。



Zeilhofer特定講師のご説明の様子

10/8には、本学出身者である熊本大学の平岡斉士准教授にインストラクショナルデザインの基礎を講義していただきました。始めに方法(例えば、反転授業など)ありきではなく、学習目標の合理的設計の結果、その方法になるという筋道が重要であることがあらためて理解されました。11/18、12/13には2回連続で、学術情報メディアセンターの美馬秀樹特定教授にMIMAサーチというテキストマイニングツールや講義動画の自動翻訳についてお話しくださいました。MIMAサーチは東大はじめすでに多くの大学でシラバス検索やカリキュラム評価などに使われており、京大でも活用が望まれるところです。

7/8と12/23はVR(仮想現実)技術を使った取り組みの紹介でした。医学教育・国際化推進センターの山本憲講師には、医学部の臨床実習での利用、ASEAN拠点の縄田栄治教授、URAの園部太郎さん、斎藤知里さんには、国内外のフィールドワークを体感できる映像教材の開発についてお話ししていただきました。臨床実習やフィールドワークのようなオンラインでは難しいと思われてきた領域での挑戦に、まさにポストコロナの大学授業の姿を垣間見た思いがしました。

\*

\*

オンライン/ハイブリッド型授業の進め方や環境整備、学生のメンタル面でのケアや学生参加の教育的取り組みについては、この2年間の講習会でかなりの知見が蓄積されてきました。次々に新しい変異株が生まれて、コロナ禍はいつ終わるのか見通しが立ちませんが、京大の構成員の知恵と工夫を共有する仕組みがあればさまざまな危機を乗り越えられると感じた2年間でした。

(松下 佳代・田口 真奈・鈴木 健雄)